立命館大学（朱雀キャンパス／オンライン）
第3回教学実践フォーラム
2025.3.3

Futurize.
RITSUMEIKAN ANNIVERSARY

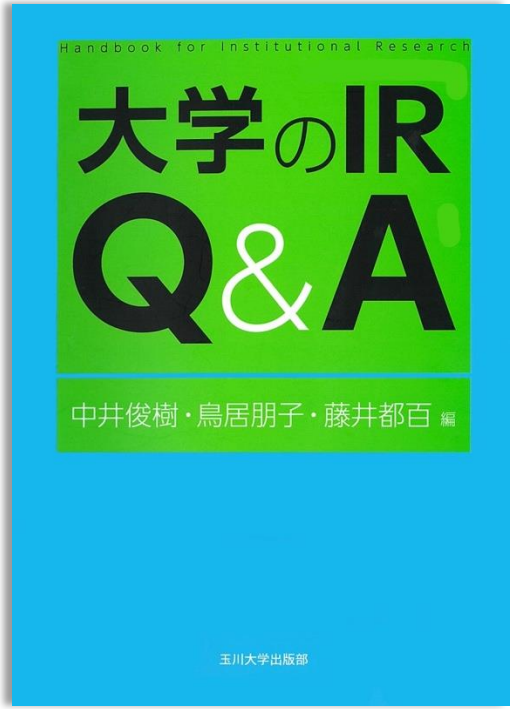
RITSUMEIKAN FOR SOCIAL IMPACT

大学コミュニティで高める教学IRのキャパシティ
-学生とともにつくるRQの可能性-

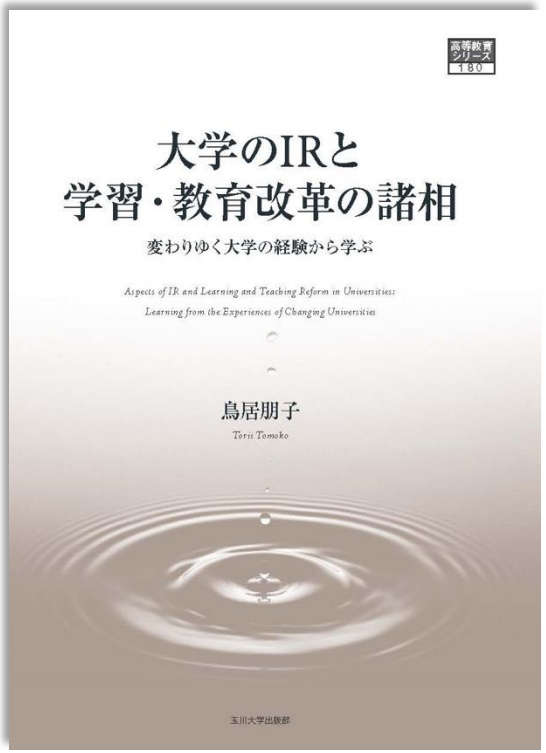
鳥居 朋子
（立命館大学教育開発推進機構）

問題意識と話題提供の概要

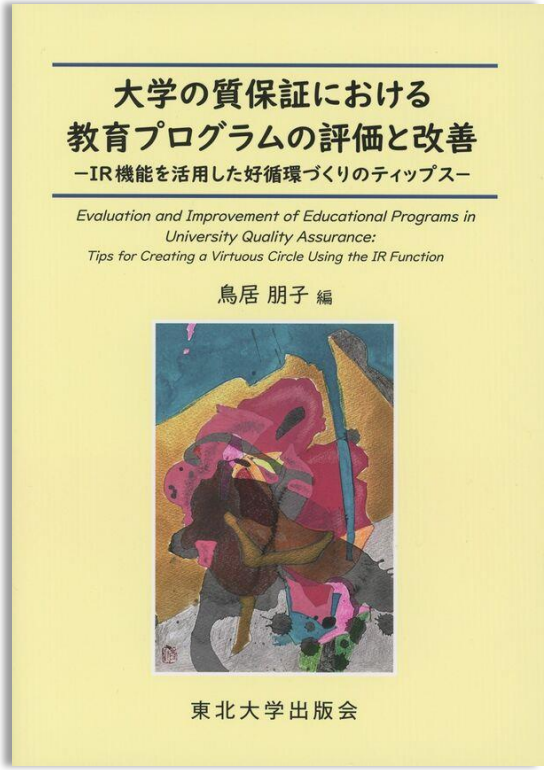
- 環境変化のなか、いかにIRのキャパシティーを高め、高等教育機関のマネジメントに貢献するか
- マネジメントや質保証への学生参画のあり方への関心の高まり
- これまで携わった実践や開発研究の振り返り、試行的な取り組み等
- ステークホルダーである学生を巻き込んだ教学IRの可能性
- IRに欠かせないリサーチ・クエスチョン（RQ）の開発を、大学コミュニティという視点から議論
  - RQの開発については、川那部隆司（2013）「教学IRにおけるリサーチ・クエスチョンの導き方 ～経験から問いを立てる～」職員共同研修（スライド資料）等、これまで報告者が学内外で提供したワーク等に基づきます。



中井俊樹・鳥居朋子・藤井都百編『大学のIR Q&A』玉川大学出版部、2013年。



鳥居朋子『大学のIRと学習・教育改革の諸相：変わりゆく大学の経験から学ぶ』玉川大学出版部、2021年。



鳥居朋子編『大学の質保証における教育プログラムの評価と改善：IR機能を活用した好循環づくりのティップス』東北大学出版会、2024年。

インスティチューショナル・リサーチ（IR）

- Institutional Research（機関調査）
  「機関の計画策定、政策形成、意思決定を支援するための情報を提供する目的で、高等教育機関の内部で行われるリサーチ」

  Saupe, J. L. (1990). *The Functions of Institutional Research*, 2nd edition. Tallahassee, FL: Association for Institutional Research, 1.

- 「リサーチ」とはいえども、単なる学術研究や調査ではない
  ⇒<u>実践志向の強い組織的な調査分析活動</u>
- IRオフィス：データや情報に基づいて行う提案や意思決定を支える機能を担う組織

0. はじめに

教学IRコトハジメ

- 本学での教学IR開発のマイルストーン

- IRプロジェクトがはじめにやったこと
  - Mission Statement (2009.5.25策定)

    全学の学部・研究科・教学機関等と協働し、教学改善の意思決定に資するデータの収集、分析、報告を通じて立命館大学の「学びのコミュニティ」の成長を支援する。
  - Values

    ・立命館大学の「学びのコミュニティ」の活動を支援するような調査方法

    ・立命館大学学生の成長（変容）がみえるデータおよび情報

    ・立命館大学の学習・教授の良さ（実態）がみえるデータおよび情報

    ・関係部局との協働によるデータ結果の表出形式

    ・部局の主体的な教学改善を尊重したコンサルテーション

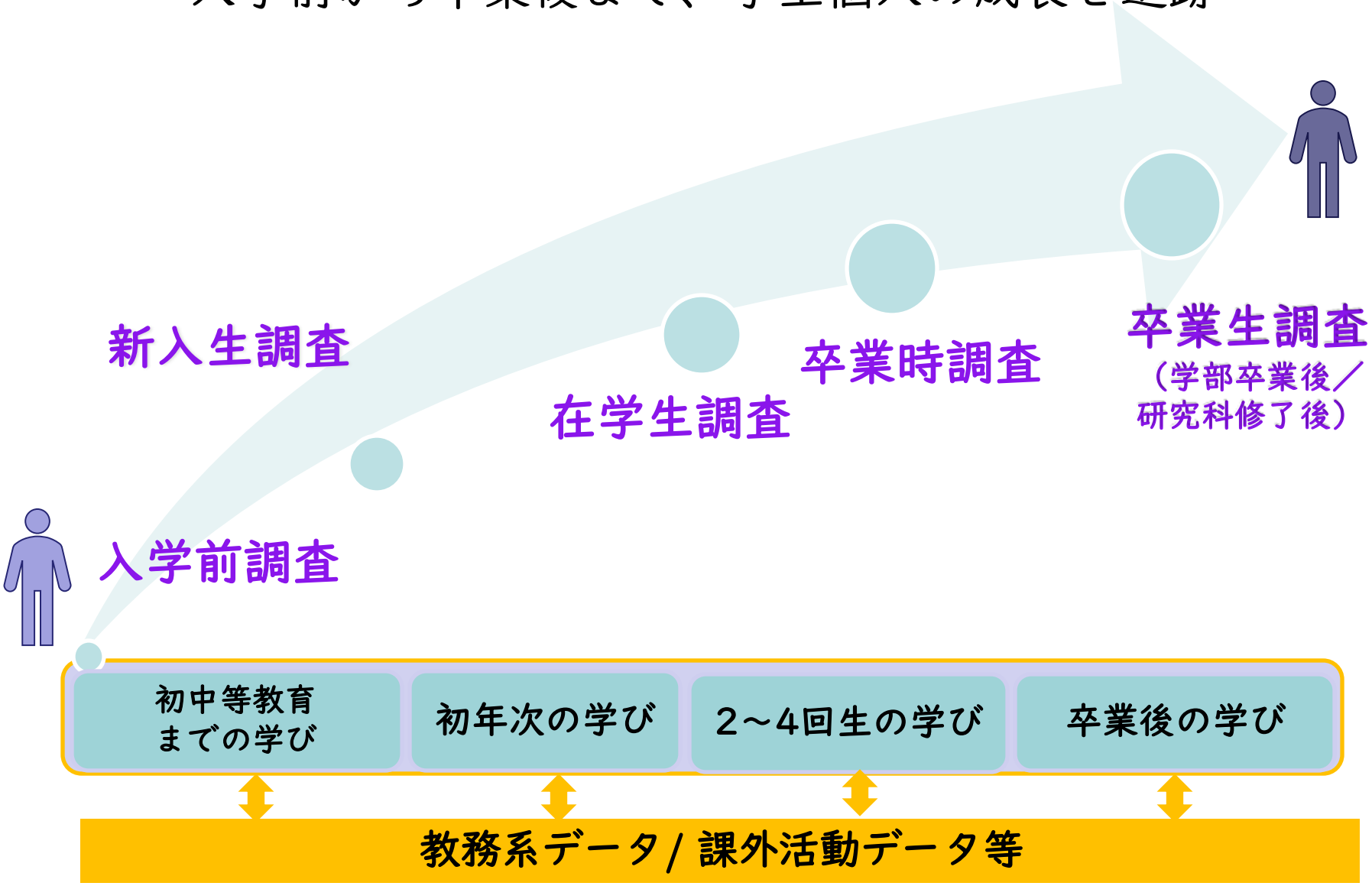
キャンパス・学部構成・学生

- 衣笠、びわこ・くさつ、大阪いばらき、朱雀
- 16学部・21研究科
- 学士課程学生　34,600人（2024.5.1現在）　うち、女子学生は13,736人
- 全国から学生が入学
- 61.4%が課外自主活動に参加（2018年度）*
- 多様な入試方式：一般入試、特別入試、附属校推薦
  ⇒学業成績、学習意欲等のレンジ
- 複雑で多彩なカリキュラム
- AIを活用した入学前教育の一部導入

*「2018年度 立命館大学の課外自主活動実態調査」（2019/05/27 学生生活会議）

学びと成長を観測する総合的なシステム

入学前から卒業後まで、学生個人の成長を追跡



1. 背景：
教学IRのキャパシティへの視点

大学教育の質保証をめぐる状況

- グローバリゼーション、競争的な高等教育市場、知識基盤社会、アクセスの向上
- 国際的な課題としての質保証
- 質保証の中心的課題：“Learning Outcomes”
  - 学びの成果の可視化
- 内部質保証システム

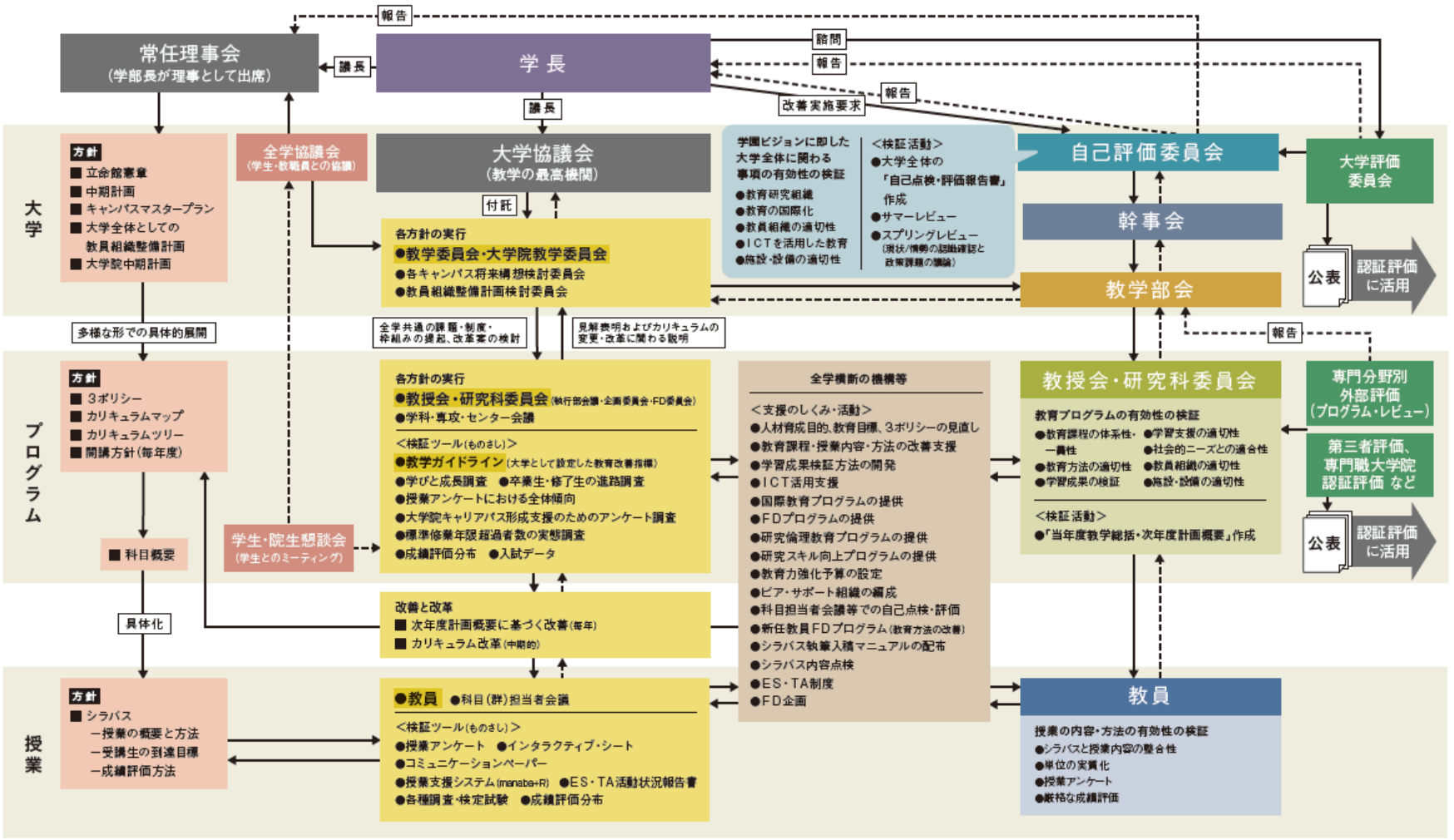
  ・機関（プログラム）の一連の活動に関する質の監視（monitoring）と向上（improvement）に用いられる大学内部の仕組み

大場淳（2009）「第7章フランスにおける高等教育の質保証」羽田貴史・米澤彰純・杉本和弘編著『高等教育質保証の国際比較』東信堂、177-195。

大学教育の質保証をめぐる状況

- 外部質保証
  - 機関（プログラム）の質の審査・維持・向上のための機関間又は機関より上位にある制度（大場 2015）
  - 例：認証評価機関など
  - 高等教育質保証機関国際ネットワーク（International Network for Quality Assurance Agencies in Higher Education： INQAAHE）の外部評価において、大学基準協会は、「基準策定や実際の評価活動における学生や卒業生の参画を求められた」（原 2023:5）。

教育に焦点を当てた内部質保証システム体系図



2020.1.22自己評価委員会議決

質保証と教学マネジメント

- 教学マネジメント
  - 大学がその教育目的を達成するために行う管理運営。大学の内部質保証の確立にも密接に関わる重要な営み

中央教育審議会大学分科会「教学マネジメント指針」（2020年1月22日） p.2。

✧教育に関する内部質保証システムを運用する個々の大学の自律的な営みが教学マネジメントだと理解できる

✧その営みを支えるのがIR機能だといえる

IRのキャンパシティをどう捉えるか

・NACUBO（全米大学・短大事務担当者協会）でMorely（2005）が提唱した組織能力モデルBOC（Building Organizational Capacity）

各高等教育機関が、今後も継続的に影響を与える方法で、組織上の課題を予測し、計画し、効果的に対応する能力

・IRにおけるキャンパシティの向上とは、組織における能力開発に関する議論から得た示唆を踏まえたもの。組織の効率性向上への要求が高まるなかで、成果に基づく説明責任は高等教育の計画において重要な要因となっている

Morley, J. E. (2005) Working more effectively by building organizational capacity. *Business officer-Washington-NACUBO*, 39(6),22.
Webber, K. L. (2018) “Institutional Research and Decision Support in Higher Education: Considerations for Today and for Tomorrow,” in Webber, K. L. (ed) *Building Capacity in Institutional Research and Decision Support in Higher Education*, Springer, 7.

IRのキャンパシティをどう捉えるか

・IR担当者に必要なスキル・セット

- 変化への適応力の強化： 自動化や雇用環境の変化など、労働市場の新たなトレンドに合わせた迅速な対応
- 未来予測と最適な判断力： 先見性を持って将来の可能性を予測し、最善の進路を選択する能力
- 倫理的な判断力の向上： 技術進歩などによる社会変革のなかで、倫理的視点を踏まえた意思決定
- 広い視野での影響の考慮： 地域的およびグローバルな視点から、組織や社会全体への影響を評価
- コミュニケーション能力： 多様な利害関係者との効果的な連携・対話

Calderon, A. J. (2018) “Building Capacity for Planning and Institutional Research – A View from Down Under,” in Webber, K. L. (ed) *Building Capacity in Institutional Research and Decision Support in Higher Education*, Springer, 193-194.

IRのキャンパシティをどう捉えるか

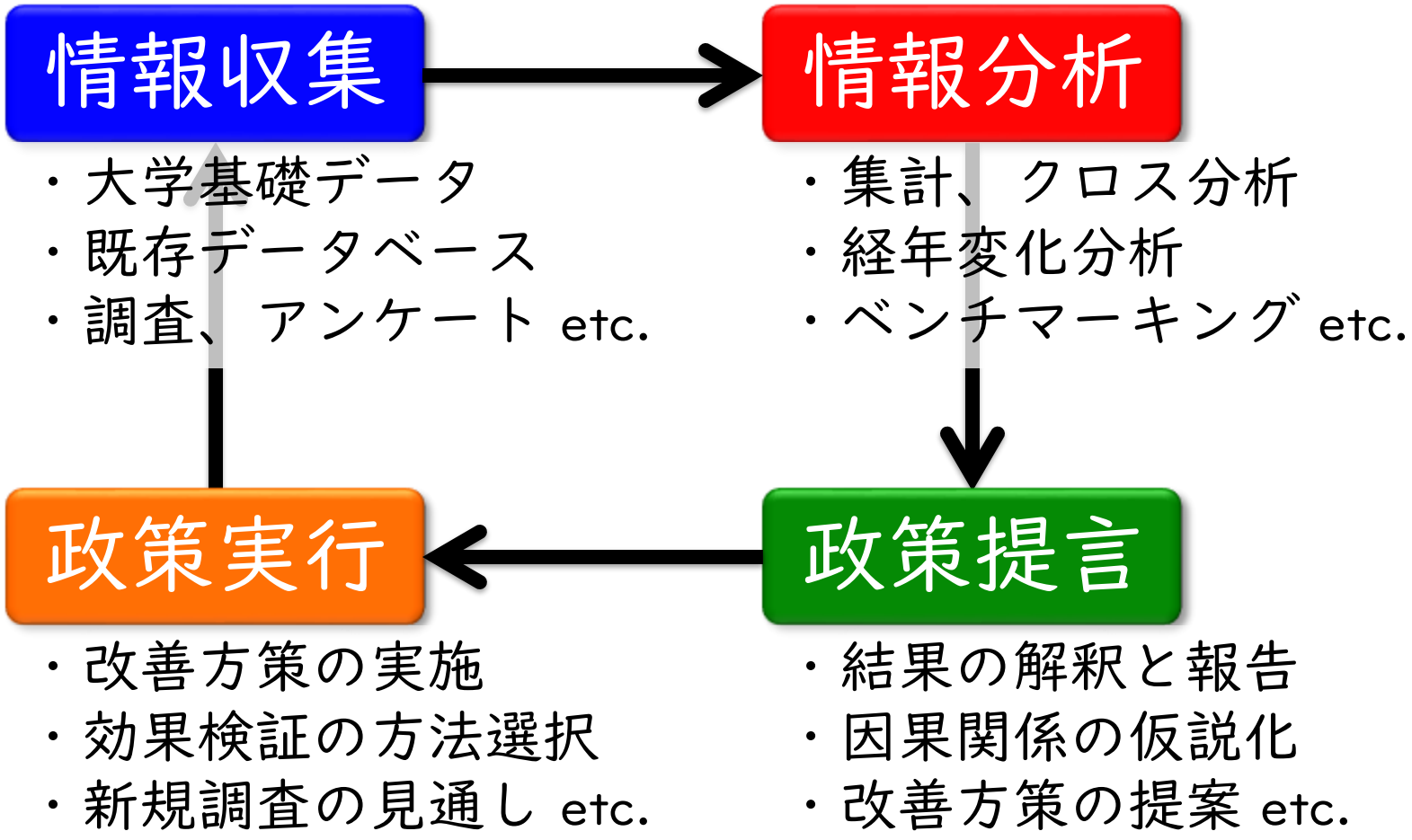
・Terenzini（1993）による3つの知性
  ・第１階層：技術的・分析的な知性
  ・第２階層：課題に関する知性
  ・第３階層：高等教育や組織の文脈に関する知性

第１階層の知性は基本的・基礎的なものだが、より高い知性がなければ、その実用性や価値はほとんどない

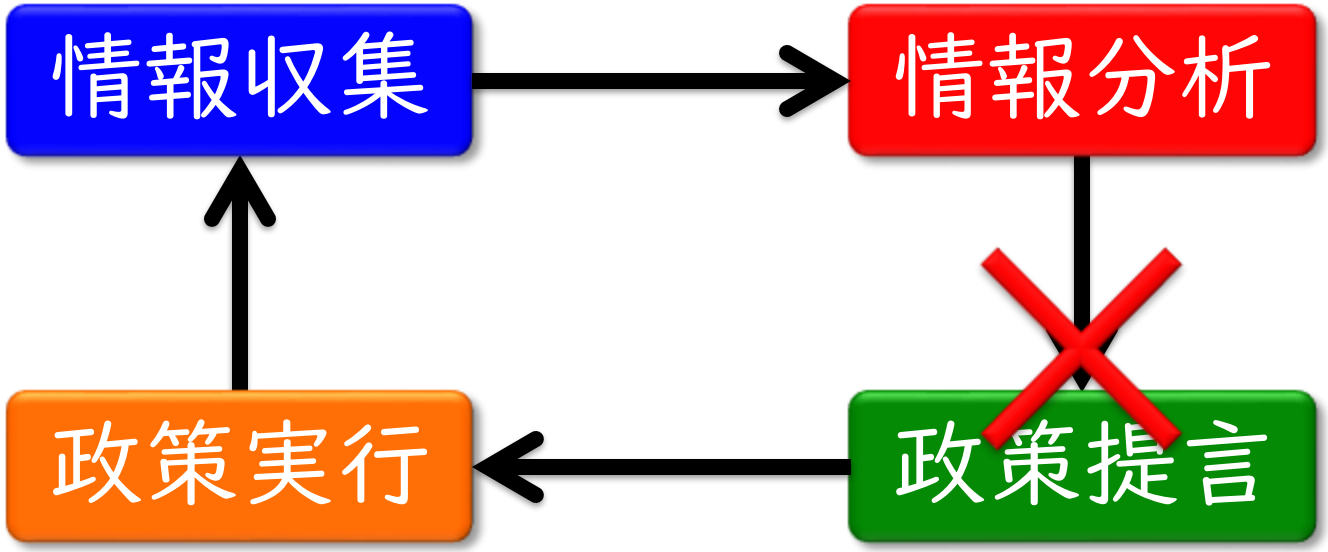
第１階層の知性自体は、情報なきデータ、目的なきプロセス、問題なき分析、問いなき答えで構成されているから

・ジェネラリストとしての職員が担当するIRの優位性（Torii et al. 2023）
  ・部署異動で培い得る第３階層の知性

教学IRの基本的なプロセス



教学IRの基本的なプロセス



データを分析するだけでは、解釈が難しい or
改善方策を見出すことができないことが多い

研究、分析を行う前にリサーチ・クエスチョンを明確にしておくことが重要

Research Question（RQ）の開発

- 機関の意思決定を支えるIRにはRQが不可欠
  - やみくもな分析には限界がある
    - DRIP
  - 何らかの意思決定を念頭においてデータや情報に向き合う時、「問い」が必要
  - 具体的な改善の方策が導き出せるようなデータをとる

IRのRQ

❖RQが導くもの

✓ 機関にとって明らかにしたい「問い」

✓ 分析結果とその解釈は「問い」に対する「答え」

❖ 広すぎても狭すぎてもいけない

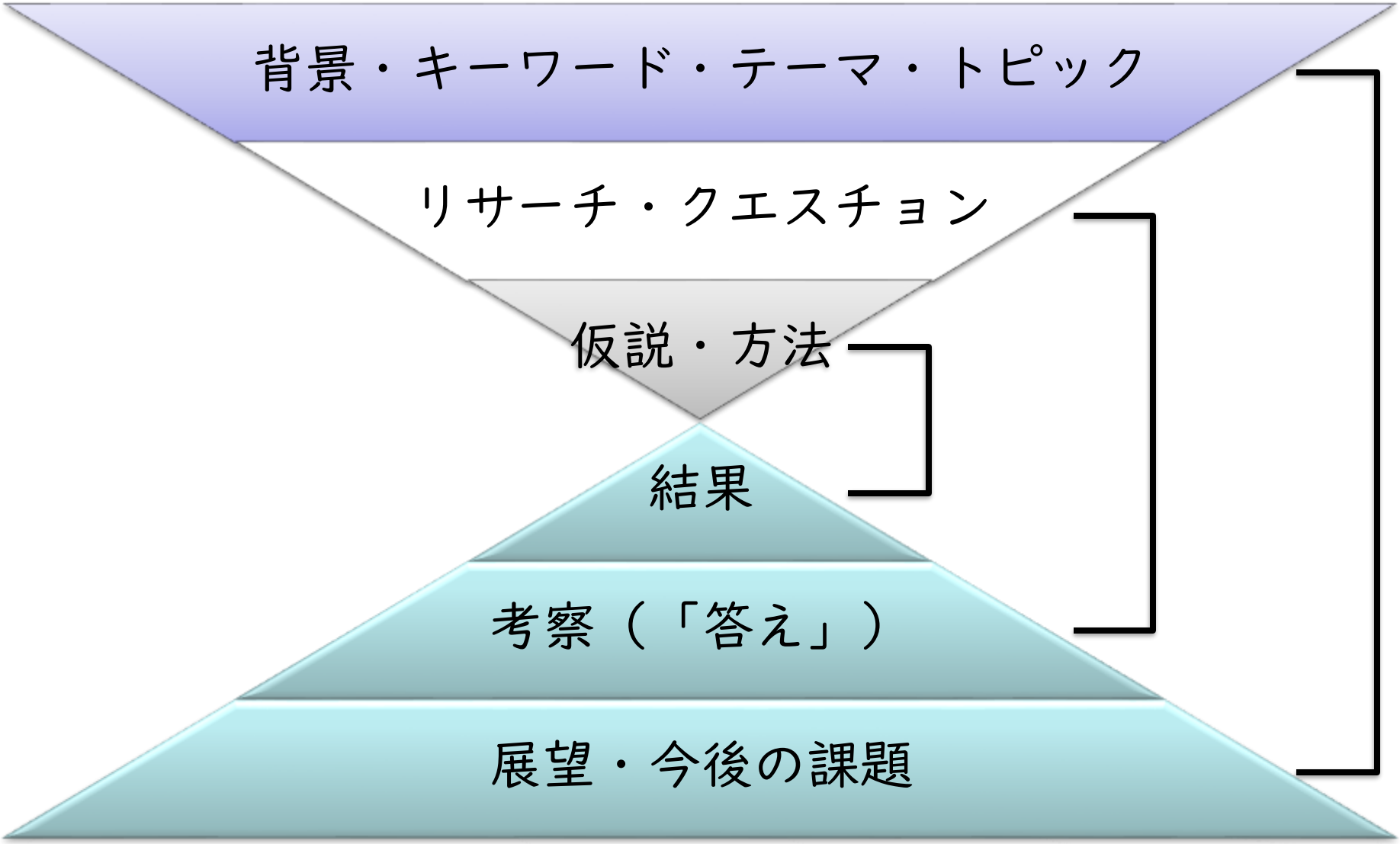
✓ 広すぎると、（容易には）明らかにできない

例：学生の授業外学習時間を増やすには？

✓ 狭すぎると、わざわざ調べるほどではない

例：レポートを課すと学生の授業外学習時間は増えるのか？（状況によってはこれでもOKだが…）

RQの位置付け



2. RQの諸相

（鳥居 2021）をもとに

米国・ペンシルベニア州立大学

【中退のおそれのある学生】低い家計収入および学力の学生たちのうち、財政的な問題や教学上のバリアを克服し、6年以内に学士号を取得できる者にはどのような特徴があるのか？

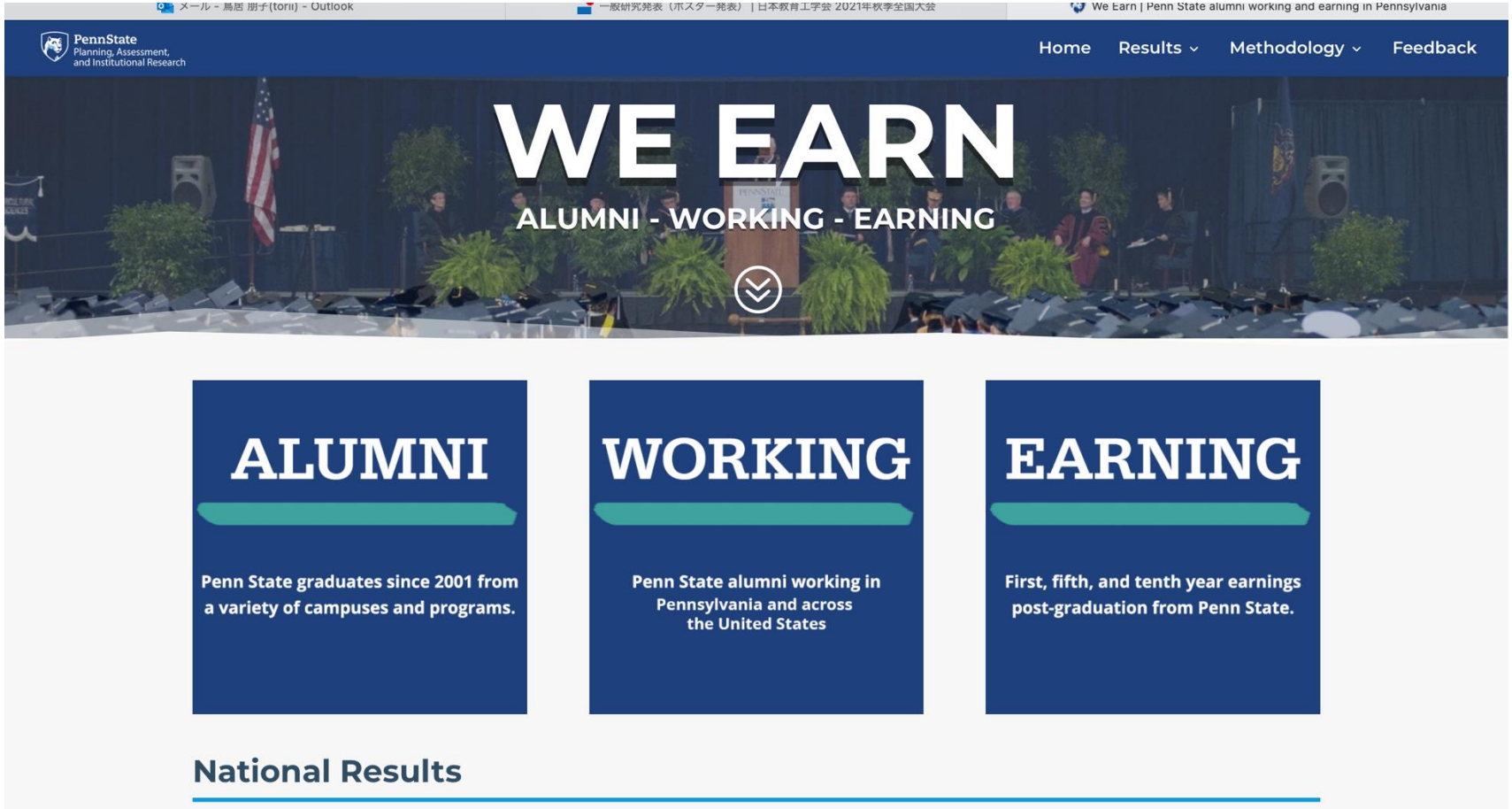
[データ]世帯所得、第1セメスターのGPA、6年での学位取得率　等

Guidos, M., Dooris, M. (2008) Characteristics of At-Risk Students Who Graduate. Presentation, Association for Institutional Research Annual Forum, Seattle, Washington.

米国・ペンシルベニア州立大学

- 戦略的計画の策定と実行
  「Our Commitment to Impact: Penn State Strategic Plan for 2016 to 2025」（2019.12改訂）
  - すべての活動を支える6つの基礎：コミュニティ全員の責任
    - 教育へのアクセスを可能にする、学生を惹きつける、包摂・公正・多様性を推進する、グローバルな活動を強化する、経済発展を促進する、持続可能な未来を確保する
- <u>計画案へのフィードバックには学生も関与</u>
- 学内の評価管理システム（Assessment Management System）を通じて、IR室が部局（予算策定単位）を助けるための講習等を提供（Penn State News 2021）

Penn State News, 2021, “Penn State units moving forward with strategic plan implementation,” (April 26). (https://news.psu.edu/story/656442/2021/04/26/administration/penn-state-units-moving-forward-strategic-plan-implementation, 2021.6.1).
The Pennsylvania State University, 2020, “Our Commitment to Impact: The Pennsylvania State University’s Strategic Plan for 2016 to 2025.” (https://sites.psu.edu/strategicplan/files/2016/12/Our-Commitment-to-Impact-2016-2025-R1.pdf, 2021.6.1).



・学生の負債額の上昇、州経済発展への貢献
・「学位の価値（value of degree）」の検証
・投資収益率（ROI）の視点から卒業生の収入に関する管理データを分析
・インタラクティブ・ダッシュボード「WE EARN」
　・キャンパス別、カレッジ別、学位レベル別、プログラム別
　・卒業後1年目・5年目・10年目の収入、STEM分野留学生の州内就労状況等
　・男女別、人種別等（学内限定）

（https://weearn.psu.edu　2025.2.22）

問いに応じたデータ整備と活用

- 在学生や保護者、進学予定の高校生にとって参考となる情報提供
  - 「ペンシルベニア州での収入のうち、どれぐらいが学生ローンの返済に充てられているのか？」
  - 大学院進学後のROI：付加的な収益の可能性、生涯における価値の可視化
- プログラム別の負債を抱える学生の割合：大学が介入できることがらの検討
  - DEIの視点から格差是正方策の検討に活用
- 州労働産業局等の学外機関とのパートナーシップ
  - 州外の労働市場で働くことを前提とした専攻の「価値」を見定めることに限界（映画、演劇、技術系等）
- リアルタイムの情報によって環境急変期の適応を高める必要性（The Pennsylvania State University 2020）

The Pennsylvania State University, 2020, "Our Commitment to Impact: The Pennsylvania State University’s Strategic Plan for 2016 to 2025.” (https://sites.psu.edu/strategicplan/files/2016/12/Our-Commitment-to-Impact-2016-2025-R1.pdf, 2021.6.1).

米国・カリフォルニア州立大学ロングビーチ校の事例

①【卒業率】教育改善にデータを活用することによって、大学、学部、学科レベルにおける学生の修学継続率や卒業率はどれくらい向上したのか？

【データ】学部・学科、ジェンダー、民族、補習教育対象等のサブグループごとの入学状況、受講登録状況、残留率、進級率、卒業率、卒業までに要した年数　等

②【学習成果測定および教育プログラム評価】大学の取り組みは、一般教育を含む教育プログラムにおける学生の学習成果にどのような影響を与えたのか？

【データ】各教育プログラムの学習成果測定の状況、測定結果の活用状況、学習成果の改善状況　等

鳥居（2021）の第2章もご参照ください。もとはCalifornia State University, Long Beach(2010). *Educational Effectiveness Review for reaffirmation of Accreditation : Submitted to the Western Association of Schools and Colleges*, October, 2010.（内部資料）

英国・キングストン大学の事例

- IR部門：戦略的計画・データ分析（Strategic Planning and Data Insights: SPDI）
  - 実効性ある意思決定の前提となるRQを、共通フォーマットを用いて部局と協同開発
    - 明らかにすべきこと
    - 母集団
    - 分析タイプ
    - 目的
    - 期限　等
  - IDやRQの種別でタグ付けし組織的に管理
  - 学内のデータ・コミュニティ形成

詳しくは、鳥居（2021）の第4章もご参照ください。

立命館大学の事例

- 卒業時に自身の進路決定状況に満足している学生は、在学中にどのような学びを展開しているのか？
- 学年進行にしたがってGPAが低下している学生は、基礎学力が低く、怠学傾向があるのか？
- アスリート学生において、学生同士の交流の程度は学習成果にどのような影響を与えているのか？

⇨学部等の教学機関や担当事務局との協働開発

鳥居朋子（2015）「立命館大学における教学 IR の開発の現状と展望― IR プロジェクトの歩みとリサーチ・クエスチョンを通して ―」『立命館高等教育』15号、47。
鳥居（2021）の第５章もご参照ください。

大規模大学に固有の課題

- 多様な学生（進学動機、学業成績、学習意欲、進路志望など）に対して、大学はどのようにかれらが成長する機会を提供すればよいか
- 学生が抱えている困難や関心事等を的確に把握することが前提に
  - コロナ禍をきっかけに希薄となった学友とのつながりの回復や、偶発的な学びの場づくりも重要

教育という営みの特徴

・教える側の資源だけが「教育目標を達成する資源ではない」ところにある

・学ぶ生徒側の努力と協力がなければ、教育のアウトプットは向上しない

・あらゆるサービスの成果は、すべて共同生産物（joint product）だが、教育ほど需要側（生徒）の影響が大きいサービスは存在しない

矢野眞和・濱中淳子・小川和孝（2016）『教育劣位社会：教育費をめぐる世論の社会学』岩波書店、19。

学生調査が必要とされる理由

- 質保証を重視した大学教育への対応
  - 教員中心から学習者中心の教育へ
- 教職員が思う「学生の視点」の限界
  - それなりに的を射ていることも多いが・・・
  - 個々の教職員が知っている学生のみの話になってしまったり、場合によっては単なる思い込みだったりもする
  - オンライン授業は、対面授業に比して受講生の実態や反応が掴みにくい

学生の「声」を聞く

- 教職員が思う「学生の視点」ではなく、学生のリアルな声を聞き、それに基づき教育を考える

⇨質保証や教学マネジメントへの学生参画は次期認証評価（大学基準協会）の課題

- 各教職員の目の前の学生だけでなく、学生全体の声を知るための学生調査
- 他にも
  - 授業や個別の研究指導、相談対応の際に直接学生から聞く
  - 授業ごとの状況を授業アンケートでつかむ
  - 面接法を実施する（川那部ほか 2013）
  - フォーカスグループを実施する　など

学生参画の定義

田中（2018：19）

・Healey, et.al.（2010）の3つのレベルにしたがって、

学生参画とは、

① 学生個人および同僚の学習成果を最大化する目的で、または、

② 大学教育の質を保証・向上させる目的で、あるいは、

③ 大学運営に学生・大学・社会の利益を反映させる目的で、

<u>学生が自らの労力や情報を大学に提供する</u>ことである。

（下線は報告者）

田中正弘（2018）「日本の大学における学生参画―質保証への参画を中心として―」『大学研究』45、17-30。
Healey, M., Mason-O'Connor, K. and Broadfoot, P., (2010) "Reflections on Engaging Student in the Process and Product of Strategy Development for Learning, Teaching, and Assessment: An institutional case study," *International Journal for Academic Development*, 15(1), 19-32.

データに基づく学生参画の局面

Safari　ファイル　編集　表示　履歴　ブックマーク　開発　ウインドウ　ヘルプ

ritsumei.ac.jp

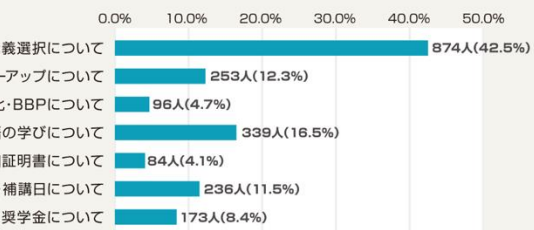
第Ⅱ章 各パートから出された主要な論点｜2019年度全学協議会確認文書｜2019年度全学協議会 | 全学協議会 - The Plenary Council

7月18日(木) 11:01

ritsumei.ac.jp

19年度全学協議会確認文書｜2019年度全学協議会 | 全学協議会 - The Plenary Council of the University | 立命館大学

進めるための手続きである受講登録について、以下の点を主張しました。シラ
あることは理解しているが、学友会アンケートの結果から学生の利用実態をみ
「評価方法」を確認するものの、授業を選択する際に重要な「授業の到達目標」
実態を指摘しました。その上で、シラバスの記載内容について確認すべきポイ
を選択する際に活用しやすいものになっていない点を課題として指摘しまし
向けて、過去の授業アンケート結果が参照しやすいような工夫も必要である点
受講登録に関わり、受講登録期間を第1回目の授業を受講した後に設定するこ
できることも考えられることから、そうした設定となっていない現行の受講登
めました。



37.大学での学びについての重要度-1位(n=2055)

2019年度全学協議会確認文書

Academy Report 2019 | Memorandum of the Plenary Council of the Univ

第Ⅱ章

各パートから出された主要な論

会から出された主要な論点

学協議会の議論では、学友会は2018年度までの議論を踏まえ、また学生の実態
生部と共同で実施した「新入生アンケート（以下、新入生アンケートという）」
象として実施した「全学学生アンケート2019（以下、学友会アンケートという
の把握を進めました。公開で行った第1回全学協議会では、こうした学生の声に
を整理し、(1)教学施策について、(2)学生生活の向上について、(3)今後の学園創
む）の3点を重点的に議論することを求めました。学友会が提起した具体的な論

学施策について

データの分析と結果の共有

- 「学びと成長レポート」（随時発行）

  http://www.ritsumei.ac.jp/itl/outline/publications/
  （2025.2.26アクセス）

  👉 問いに基づくIRレポート

- FDへの橋渡し
  - データに基づく学生実態の情報活用
    - ・新任教員ガイダンスでの共有
    - ・ES（学生サポーター）研修での共有 等

3. RQ開発のステップと学生たちとの試み

その大学にとって意味のあるRQの開発

- リサーチ・クエスチョンを明確にする
  - ✓ データを収集する前に行う
- 改善により結びつきやすいリサーチ・クエスチョンを考える
  - ✓ より多くの教職員に共通する問題関心
  - ✓ 現場での経験にこそヒントがある
- 「より多くの教職員に共通する問題関心」を見つける
  - ✓ 互いの考えを共有する（これ自体もFD／SD）

⇨学生自身のリアルな問題関心をRQの形にし、IRの一連の流れにのせていくアプローチ

・企画系職員研修、教学部職員研修等からの要請
・他大学FD/SD研修、他大学院授業でのミニ演習
・学士課程授業での試行的実践

参考：教職員が協働して行う RQ開発ワークショップの流れ

STEP1. 各自のアイデアを出す

✓ 「大学の抱える課題」、興味・関心など

STEP2. グループでアイデアを共有する

✓ 意見を発表し合う（ブレインストーミング）

STEP3. 情報を整理・統合する

✓ KJ法を利用したアイデアの分析

STEP4. 全体で意見を共有する

✓ 取り組むべき「課題」とは？

※本日はワークは行いませんが、参考までに流れを紹介します。

STEP 1. 各自のアイデアを出す

- ❖大学が現在抱えている、あるいは今後抱えることが予想される課題を考える
  - ✓最初に思いついた課題（or キーワード）を書く（ワークシートの中心に記載する）
  - ✓書いた課題から連想するキーワードや別の課題を線でつなぎながら広げていく

STEP 2. グループでアイデアを共有する

❖ 各自で考えた「課題」を発表し合う

- ✓ 進行役、記録役を1名ずつ選ぶ
- ✓ メンバーから出された「課題」について、自由に意見を出し合う

STEP 3. 情報を整理・統合する①

❖ 情報を整理する

- ✓ 話し合いで出た意見をカード（ポストイット）に記述する
- ✓ 1枚のカードには1つの課題を書く

- ✓ すべてのカードを机上に並べ、俯瞰する
- ✓ カードに書かれた「課題」の中から、似通ったもの同士でまとまりをつくる
- ✓ それぞれのまとまりにラベル（名前）をつけ、ラベル用のカードに記入する

STEP3. 情報を整理・統合する②

❖ 情報を統合する（図解化）

- ✓ ストーリー性（因果関係、併存関係など）を考えながら、ラベルを配置していく
- ✓ 縁取り線、関係を表す線、記号などを用いて、情報をまとめていく

- ✓必要性、緊急性、実現可能性などを考慮に入れつつ、取り組むべき「課題」を特定する

STEP3. 情報を整理・統合する③

❖ 情報を明文化する（叙述化）

✓ 作成した図解を基に、「課題」が何なのか、何に取り組んでいけば良いかを文章化する

✓ 文章化の際に、新たに気付いた点などがあれば、記録しておく

STEP4. 全体で意見を共有する

❖ グループで作成した文章を発表し合い、意見交換を行う

- ✓ 情報の図解化、叙述化における問題はなかったか？
- ✓ 課題の特定が主観的になっていないか？

STEP5. リサーチ・クエスチョンにする

❖ 完成した文章をもとに、リサーチ・クエスチョンを導き出す

- ✓ 文章を疑問形にする（もともと疑問形であれば不要）

❖ リサーチ・クエスチョンの導出…の次は？

- ✓ 仮説を立てる（先行研究・事例の収集含む）
- ✓ 仮説検証に必要なデータとその所在を考える
- ✓ 情報収集（新規調査含む）、分析、報告

⇨教学IRの一連の流れにのせていく

大規模授業でのRQ開発の演習

- 学士課程教養科目（1セメスター15週）
  - 2023年度&2024年度
    - BKC、OICの3クラス
    - 1～4回生受講、複数学部
- 現代の教育をテーマとする概論的科目
  - 高等教育をテーマとする3つの回で、国際的な政策動向、質保証や学習成果、IR等を解説
  - 受講生各自が立命館大学にとって重要なRQを考案する演習
    - 362のRQ、必要なデータ・情報、調査方法等

（本人の了解を得た成果物に基づき紹介します）

当日映写いたします。

※受講生の成果物ですので、撮影・録画はご遠慮ください。

学生が開発したRQの主な領域（GPT-4o）

〇授業形式・学習方法 (30%)

・学習形態の差異が学習効果に与える影響

・学生の満足度と学習成果の相関

〇大学生活・QOL (20%)

・学生活の充実度を決定する要因

・サークル活動が大学生活に与える影響

〇就職・キャリア (15%)

・大学のキャリアサポートが就職成功に与える影響

・GPAと高収入企業の関係

〇留学・言語学習 (5%)

・留学経験が就職・キャリアにどのような影響を与えるか

・留学前の英語証明の有無と留学満足度の相関

〇SNS・デジタル利用 (5%)

・SNS利用時間と学習成果の相関

・スマートフォンの利用が大学生の学習・心理等に与える影響

〇メンタルヘルス・ストレス (3%)

・食生活や運動習慣が学業成果やQOLに与える影響

できれば入学前に知っておきたかったことがら

学生が開発したRQのインサイト

- 学生が表現する微妙なわだかまりや戸惑い、迷い（「バリ」のようなもの）まで綺麗に削ぎ落とされ、整形されてしまう
  - 「うまいこと言ったった」感
  - クリニカル・クエスチョンにこそ現れる学生の本音
- 学生の原案に必ず目を通すことがたいせつ
- なぜそのRQを考案したのか、学生の多様なバックグラウンドの理解も重要

学生とともにつくるRQの手応えと可能性

- データに基づく学習・教育改善や意思決定の推進。その大学にとってより適切で妥当なRQの開発とデータ収集・分析の基盤に
- 内部質保証への学生参画の新たなアプローチ
  - 学生自身が答えを知りたいと思う、学生目線のRQ。低回生／高回生を問わない
- 学生が大学IRの意義を理解し、データをもとに自分たちの学びについてリフレクション＆議論する意義
- 運用可能なRQへのブラッシュアップ、データの所在や収集方法、分析方法等については教職員の経験や知恵、助力が必要

4. 最後に

できたこと、積み残したこと

- □立命館大学の「学びのコミュニティ」の活動を支援するような調査方法
- □立命館大学学生の成長（変容）がみえるデータおよび情報
- □立命館大学の学習・教授の良さ（実態）がみえるデータおよび情報
- □関係部局との協働によるデータ結果の表出形式
- □部局の主体的な教学改善を尊重したコンサルテーション

ご清聴ありがとうございました

主な参考文献

- Guidos, M., Dooris, M. (2008) Characteristics of At-Risk Students Who Graduate. Presentation, Association for Institutional Research Annual Forum, Seattle, Washington.
- 川那部隆司・笠原健一・鳥居朋子（2013）「教学IR における学生調査の手法開発：量的アプローチと質的アプローチを併用した学業成績変化過程の検討」『立命館高等教育研究』13号、61-74.
- 原和世（2023）「INQAAHE GGP アライメント取得について」『じゅあ 高等教育の質の向上を目指して』大学基準協会、No.70、5。
- Healey, M., Mason-O'Connor, K. and Broadfoot, P., (2010) Reflections on Engaging Student in the Process and Product of Strategy Development for Learning, Teaching, and Assessment: An institutional case study, *International Journal for Academic Development*, 15(1), 19-32.
- 大場淳（2009）「第7章フランスにおける高等教育の質保証」羽田貴史・米澤彰純・杉本和弘編著『高等教育質保証の国際比較』東信堂、177-195。
- 大場淳（2015）「フランスの大学の自律性と質保証」田川千尋編『グローバル化と高等教育－フランスを事例に』大阪大学未来戦略機構第五部門、11-26。
- Saupe, J. L. (1990) *The Functions of Institutional Research*, 2nd edition. Tallahassee, FL: Association for Institutional Research.
- 田中正弘（2018）「日本の大学における学生参画―質保証への参画を中心として―」『大学研究』45、17-30。
- Terenzini, P. T. (1993) On the Nature of Institutional Research and the Knowledge and Skills It Requires, *Research in Higher Education*, 34(1), AIR Forum Issue, (Feb. 1993), 1-10.
- 鳥居朋子（2015）「立命館大学における教学 IR の開発の現状と展望― IR プロジェクトの歩みとリサーチ・クエスチョンを通して ―」『立命館高等教育研究』15号、37-53.
- 鳥居朋子（2021）『大学のIRと学習・教育改革の諸相－変わりゆく大学の経験から学ぶ』玉川大学出版部。
- Torii, T., Kondo, N., and Yamamoto, K. (2023) Holistic Approach to Successful Institutional Research and Institutional Effectiveness Based on Local Intelligence in Japanese Universities: Required Conditions for Bridging IR and IE, *Asia-Japan Research Academic Bulletin* 4, 1-13.
- Webber, K. L. (ed) (2018) *Building Capacity in Institutional Research and Decision Support in Higher Education*, Springer.
- 矢野眞和・濱中淳子・小川和孝（2016）『教育劣位社会：教育費をめぐる世論の社会学』岩波書店。